五月の一週間

——東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於ける保育の實際——

はしがき

倉橋惣三

幼稚園は生きてゐる。その生きてゐるところを、ありのまゝに、なま〳〵しく記しとめたのが、之等の日誌である。保姆諸君は皆、お恥しいことでと言つてゐる。人に示さうとする標本でもなく、保育の型でもないのは勿論である。

しかし、その中に、私達が平生話しあつてゐる考へ方や、心もちが、全局的に、又部分的に、おのづから實現せられてゐるものに相違ない。私としては、それが今更にうれしい。また、そこを汲み取つて下さる方があつたら、手をさし伸べて握手したいやうの氣がする。と同時に、批判と異議とも、先づ私にぶつつけて頂かなければならない。

各組は、同じことをしてはゐない。しかし、離れてもゐない。一つの幼稚園の組々として、統制のある獨自を持してゐる。保育は一定の原理に基礎づけられてゐるが、その實際は、どこまでも、娘姆その人の創造によるものだといふのが、私達の信念である。

保育は、幼兒を娵姆の計畫の中へ押し込めて來ることではない。幼兒達の生活へ娵姆の方から赴き往くものである。しかし、それと少しも矛盾しない意味で、娵姆の計畫と、工夫と、考案と、準備とによつて、幼兒達の生活を一層生かしてゆくのが保育である。私達が、無計畫保育をしてゐるやうに見る人もあるかも知れないが、とんでもないことだ。我園の娵姆諸君は、幼兒を頭から虜にしやうとするやうな鬼でもないが、計畫と準備をなしに其日々々がやつてのけられるやうな、神通力の所有者でも大膽者でもない。

保育の計畫は、たゞ考への上の立案だけではない。況んや、紙の上に書いた保育項目の次第書だけではない。幼兒達の生活が、そこから誘ひ出され、そこへ納まつてゆく、具象の實體で準備せられる。頭で計畫し、物で準備し、保育項目を放射させ、聚約させ、幼兒の生活を、生活としての自由と必然とに生かしてゆくのが計畫である。個と群とを對象にして。

それにしても、生きた保育をするために、自分も刻々に生き、且、たえず創造してゆかなければならぬ心勞と身勞とは容易のことではない。しかし、さういふ娵姆諸君こそ、刻々に保育の實際の味を味ひ樂しむことが出來る幸福な人であらう。

尙、全體を通じて、左の如く御承知願つて置く。

月曜日（五月二十三日）　曇後雨　　火曜日（二十四日）　晴
水曜日（　二十五日）　曇、風　　木曜日（二十六日）　晴、風强し
金曜日（　二十七日）　晴　　土曜日（二十八日）　曇

海の組（滿五歲より滿六歲）男兒十八人、女兒十人　　川の組（滿四歲より滿五歲）男兒十八人、女兒十一人
山の組（右に同じ　）男兒十九人、女兒十人　　森の組（右に同じ　）男兒十五人、女兒十五人
池の組（右に同じ　）男兒十五人、女兒十三人　　林の組（右に同じ　）男兒十五人、女兒十五人